

## 戦時下の青春

菅原 ヤス子（昭和4年生まれ）

私は昭和4年生まれです。父は男児の誕生を期待していたのに「又女っ子か」と落胆したそうです。戦争への兆しが忍び寄り、昭和6年満州事変勃発、それが引き金となり戦火は中国へ拡大し、昭和12年日支事変となり、やがて私も小学生となりました。大和撫子の自覚を持ち、大君のため国のため忠君愛国の心をたたき込まれました。そして小学6年の12月8日、遂に太平洋戦争に突入し、旗行列、提灯行列の先頭に立って戦勝祈願をしました。

教室の正面の掲示板には「私達は天皇陛下の赤子です。礼節に欠くることなかりしか、学んで怠ることなかりしか」と毎朝読み上げ、校舎の柱という柱に『ほしがりません勝つまでは』『撃ちてし止まん』の標語が張られ、我慢と辛抱の毎日でした。寒中とて靴下も足袋もはけず、口に入るものは残さずに食べ空腹に耐え、文句も言わず頑張れば神風が吹いて勝つと信じていました。当時私は浜っ子（上下浜小学校）で、弁当持ちで登校する子は珍しく、ほとんど昼上がりをして粥か雑炊を啜り、芋の蔓も南瓜の葉も雑草も食べました。

大和撫子の体育は戦時訓練で雑刀や竹槍でした。汗をかくとぞろぞろと首筋へ降りて来る頭虱を左右の手の爪でつぶすとピチンと潰れて鮮血をはじく。そのうち虱も蚤も身の一部と思い、歯と歯で潰して思い切って飲みこみました。

戦争は益々激しくなり、神風も吹かず、毎日のように柿崎駅まで出征兵士を送ります。4キロメートルの砂利道を靴もなく、下駄か藁草履で往復歩きます。足の裏に血豆ができ、日の丸の小旗を振って歌います。「露営の歌」で見送り、時々戦死の方の遺骨のお迎えに行くのです。「これが別れぞ此の次にまみえん時は沈黙の白木の箱ぞその時も万歳頼むと笑いたる皇国の勇士は今還る」悲しくも痛ましい、そして美しいメロディに泣きました。湧き出る涙を払いもせず泣きながら歌って帰る道すがら叱られたり、打たれたりしました。

小学校から高等科に進みました。高等科の上に特修科と青年学校がありました。大きくて、立派な先輩が次々と志願をして出征して行かれました。「では行きます。」と短い挨拶を残し、日の丸の旗をたすきがけに敬礼する姿は凜として格好よく、あまりにも立派な大和男子でした。こうした憧れと、淡い恋心を抱いた人も沖縄の空で還らぬ人となったと聞きました。戦死を覚悟の別離です。あまりにも哀しく切なく、そして美しいものでした。

昭和19年私は念願がない、長岡女子師範学校へ入学し、モンペ姿の入学式でした。何もかも不自由な寮生活だったが食事は殊の外ひどく、麦飯、豆飯、大根飯は上等品、時に玉蜀黍パンが出る、硬くて黒くスリッパの底のように見え、腹立たしく思いつつも、口の中で湿らせて飲み込みました。また団栗の水団を食べた時は喉の穴から尻の穴までチクチクと痛み2日目まで苦しみました。長岡は山本五十六大将の出身地のため敵機B29が頻繁に偵察やら攻撃に飛んで来ました。警報発令の合図に勉強も作業も放り出して防空壕へもぐったり、木陰に姿を隠し、娘盛りの大和撫子は土の上でも、草の中でも、一刻一刻を惜しんで眠りこけました。ペンを捨て鋏を取り、空

き地も草地もグランドも遊び場も開墾して食糧増産のために働きました。暖房用の木炭も栖吉の山へこもって炭焼きもしました。海水を煮立てて塩も作りました。

そして昭和20年8月1日、暑さと疲労困憊も最高の頃、長岡はB29、150機による空襲にありました。ちょうど夕食時、ゴウゴウと爆音をたて尾翼に明かりをつけ、堂々と進入し焼夷弾を落として進みます。天空の途中で花火のように炸裂して、地上に落ちるとパーッと燃え広がる。市街は真昼のように明るく一面火の海でした。私たちは栖吉の山の芋穴へ逃げました。迎え撃つ友軍機は1機も見えず、高射砲も大砲の音もない、まったくの無抵抗な戦いにフーンと負け戦を予感し不安に思いました。

そして遂に8月15日、古いラジオから流れる玉音放送を聞きました。「汝ら臣民、耐えがたきを耐え・・・」天皇陛下の声は波のように、よく聞き取れず、よくわかりません。そしてその晩からピタリとB29は飛ばなくなり、部屋の暗幕も電燈カバーも汗臭い防空頭巾もはずされた身軽さ、心地よさはたまらなく嬉しく、内緒で平和を喜び合いました。が、戦後も食糧事情は益々ひどく、言語に絶する暮らしぶりでした。そんな戦中戦後の暮らしの中で「私たち女で戦場へ行かないのだから」と体力と精神力のありったけを振り絞り銃後を守って来ました。戦争一色の若き日の思い出は悲しすぎます。しかし戦争に負けたお陰で日本は世界に誇る戦争放棄の憲法が生まれました。若き日は二度とかえらない。帰らぬ若い生命と帰らぬ青春と引き換えに生まれ育った平和日本を子や孫に伝え残してやりたいから。そして腹いっぱい食べさせてやりたいと願いをこめて。